

令和 2 年 7 月 4 日現在

機関番号：72681

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02173

研究課題名(和文) ヴァイシェーシカ学派の<関係>概念の総合的研究

研究課題名(英文) A Comprehensive study on the concept of relation in Vaisesika philosophy

研究代表者

平野 克典(Hirano, Katsunori)

公益財団法人中村元東方研究所・その他部局等・専任研究員

研究者番号：70513737

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：インドのヒンドゥー正統哲学派の1つにヴァイシェーシカ学派がある。同学派が説く<関係>(結び付けるもの)の概念を考察して、同学派の存在論の特徴を明らかとした。本研究では、<結合関係>を多面的に理解するために、その対概念である<分離>の概念分析を中心に研究が推進された。事物の生成と破壊という点から世界構造をみた場合、同学派の存在論は結合関係と分離なくして成立しえない。従って、<関係>概念に着目して同学派の存在論を考察することは、同学派の存在論の新たな側面を示す上で有効な視点であったことを確認することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヴァイシェーシカ学派の<関係>概念に着目した本研究の成果には2つの学術的意義がある。

(1) <関係>概念に着目した本研究は、従来のように実体や普遍などの<結び付けられるもの>(関係項)に着目する見方とは異なっている。そのため、同学派の存在論の新たな特徴を明らかにすることができた。

(2) <関係>概念は同学派だけでなく、他学派の存在論においても重要な役割を担っている。従って、<関係>概念を精緻に分析した本研究はインド哲学全般の存在論を概観する際に有益となる知見を示した。

研究成果の概要(英文)：The project has analyzed of the concept of relation under the purpose of reconsidering the Vaisesika ontology. The analysis has been made through the Disjunction (vibhaga) Chapter in the texts of Vaisesika in order to understand the concept of Conjunction (samyoga) from a different angle. Disjunction is an opposite concept of Conjunction. The analysis has showed that the Vaisesika ontology does not establish without Conjunction and Disjunction when the structure of world which the Vaisesika school insists on is seen from a viewpoint of generation and destruction of things. Therefore, the viewpoint of the projects could be a valid for showing a new aspect of the Vaisesika ontology.

研究分野：インド哲学

キーワード：ヴァイシェーシカ学派 結合関係 内属関係 パダールタダルマサングラハ ヴィヨーマヴァティー
ニヤーヤカンドリー キラナーヴァリー 存在論

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

インド哲学の存在論において、ヴァイシェーシカ学派(以下 V 学派)の果たす役割は極めて大きい。それは研究成果に比例して現れており、V 学派に対する研究が存在論に特化していること、また他学派の存在論研究において V 学派の存在論が対比的に言及されることから確認できる。そして、V 学派の存在論は、例えば、仏教論理学派との論争を踏まえた D.N. Shastri の *The Philosophy of Nyāya-Vaiśeṣika and Its Conflict with the Buddhist Dignāga School*, Delhi/Varanasi, 1964、西洋哲学との比較も視野に入れた W. Halbfass の *On Being and What There Is*, New York, 1992、また認識論を踏まえた村上真完の『インドの実在論』、平楽寺書店、1997 など、多岐に亘る視点から考察されてきた。

しかし、V 学派の存在論研究は、実体、属性、普遍などの関係項(結び付けられるもの)に着目してなされてきた傾向がある。それ故、本研究では<関係>に着目した。なぜならば、世界を事物の結び付いた複合体とみなす V 学派の体系において、<関係>(結び付けるもの、sambandha、relation)は副次的な要素ではなく、世界を構造化たらしめるに不可欠な主要素といえるからである。とすれば、V 学派の存在論研究は次に<関係>に着目することをもって再評価される段階を迎えていよう。すなわち、いかに結び付いているかという構造化のあり方に着目した再評価である。

V 学派は2つの関係を説く。内属関係と結合関係である。そのうち、研究代表者はすでに内属関係に着目した研究を進めてきた。そして、<関係>概念に着目することで<関係項>に着目した研究では明らかとはなっていない V 学派の存在論の特徴や、さらに関係項そのものの新たな側面を明らかにできることを確認した。

また、V 学派に対する先行研究を概観した場合、<関係項>に比して<関係>は十分に研究されておらず、そのうち、<内属関係>に比して<結合関係>の研究は皆無に等しい状況にあり、さらに、<結合関係>の多面的な分析はなされていない現状が指摘できた。こうした研究当初の背景を鑑み、現状に不足している事項を1つ1つ考察していく作業を通じて V 学派の存在論の新側面の解明をめざした。

2. 研究の目的

V 学派の存在論を再評価するという研究の全体構想を設定した上で、これまでの V 学派研究に不足している事項に着目し、同学派の存在論上の新たな特徴を明らかとすることを研究の目的とした。具体的には、<結合関係>の概念を分析し、そして<内属関係>を踏まえた上で<関係>概念を総合化し、そこから同学派の存在論を明らかとする着想である。本研究では以下3つの具体的な目的を設定した。

[1] <結合関係>の概念をその対概念である<分離>から分析する。

[2] 他学派が言及する<結合関係>への反論を回収、考察する。

[3] <結合関係>と<内属関係>の両概念に基づく<関係>概念の総合化である。

上記3つの研究目的は、主に紀元前1世紀頃から紀元後11世紀までの V 学派のサンスクリット哲学文献の読解と分析を通じて推進された。具体的には、V 学派の学祖とされるカナダ(Kaṇāda)の『ヴァイシェーシカ・スートラ』(*Vaiśeṣika-sūtra*)とその注釈書である学匠プラシャスタパーダ(*Prāśastapāda*, ca. 550-600)の『パダールタ・ダルマ・サングラハ』(*Padārthadharmasaṅgraha*)、そして『パダールタ・ダルマ・サングラハ』に対する以下3つの主要な復注釈書である。すなわち、ヴィヨーマシヴァ(*Vyomaśiva*, ca. 900-960)の『ヴィヨーマヴァティー』(*Vyomavatī*)と、シ

ユリーダラ (Śrīdhara, ca. 950-1000) の『ニヤーヤ・カンダリー』(Nyāyakandālī) と、ウダヤナ (Udayana, ca. 1050-1100) の『キラナーヴァリー』(Kiraṇāvalī、以下 Kir)である。これら 5 文献は根本聖典、注釈書、復注釈書という関連性をもっており、<結合関係>および<分離>の歴史の変遷を同学派の伝統に則して理解する上で最適な文献群といえる。

本研究の開始以前に『ヴァイシェーシカ・スートラ』以外の 4 文献上の「結合関係の章」の分析は終えていた。この分析はいわば<結合関係>の正面からの考察であった。そして、先に言及した本研究の 3 つの具体的な目的には次のような意図があった。[1] <結合関係>の概念をその対概念である<分離>から分析することは、いわば裏側からの考察であり、<結合関係>を重層的に理解するためであった。次に、[2] 他学派が言及する<結合関係>への反論を回収、考察することは、いわば横側からの考察であり、<結合関係>の思想的意義を明らかにするためであった。このように、正面に裏・横面を加えた多面的な考察を通じて<結合関係>の包括的な理解をめざした。そして、[3] <結合関係>と<内属関係>の両概念に基づく<関係>概念の総合化は、<関係>概念全般の考察に止まるものではなく、その総合化から V 学派の存在論の再評価を試みるためのものであった。

3. 研究の方法

先述の「研究の目的」[1] ~ [3] に対応する「研究の方法」は次の通りである。

[1] <結合関係>の概念をその対概念である<分離>から分析する

紀元前 1 世紀頃から紀元後 11 世紀までの V 学派の根本聖典、注釈書、そして復注釈書(3 本) という関連性をもつ 5 文献に言及される<分離> (vibhāga) に関する言説を文献学的手法に基づき分析すると共に、翻訳の作成をめざした (英訳と和訳) 。なお、復注釈書の 1 つ『ヴィヨーマヴァティー』に関しては、当該箇所テキスト校訂作業をめざした。具体的な方法は以下の通りである。

- ①根本聖典『ヴァイシェーシカ・スートラ』に言及される<分離>に関する記述を収集し、それらの内容を分析する。
- ②『パダールタ・ダルマ・サングラハ』と各復注釈書の「分離の章」の内容を分析する。また、復注釈書の 1 つ『ヴィヨーマヴァティー』に関しては、同書のサンスクリットテキストの校訂作業を行う。
- ③『ヴィヨーマヴァティー』の精緻な校訂作業にはベナレス写本を確認する必要がある。そのため写本の調査を実施する。

[2] 他学派が言及する<結合関係>への反論を回収、考察する

V 学派の説く<結合関係>の概念の歴史的重要性を理解するため、ジャイナ教の哲学書、空衣派の学匠プラバーチャンドラ (10-11 世紀) 作『プラーメーヤ・カマラ・マルタンダ』と、仏教論理学派の学匠ダルマキールティー (7 世紀) 作『サンバンダパリークシャー』に言及されている V 学派の<結合関係>に関する反論の収集と分析をめざした。具体的な方法は以下の通りである。

- ①インドのプネー大学大学院サンスクリット高等研究所元所長の V.N. Jha 教授の支援を仰ぎ、ジャイナ教の<関係>概念に関する読書会を開催する。
- ②ベナレスの Sampurnanand Sanskrit 大学と、デリーの National Mission for Manuscripts を訪れ、関連するサンスクリット写本を蒐集する。

[3] <結合関係>と<内属関係>の両概念に基づく<関係>概念の総合化

<結合関係>を包括的に理解した上で、<内属関係>を踏まえ<関係>概念を総合化し捉え、V学派の存在論の特徴の解明を目指す。また、国内外の学会に参加し、情報の収集と研究成果の公表に努める。

4 . 研究成果

本研究の成果をまとめると以下のようになる。

(1) V学派の<結合関係>の理解を深めるため、『パダールタ・ダルマ・サングラハ』及び、その注釈書『ヴィヨーマヴァティー』、『ニヤーヤ・カンダリー』、『キラナーヴァリー』の「分離の章」を分析、考察した。その結果、<結合関係>の重層的な理解への端緒を付け、<結合関係>単独の考察では明らかにすることができなかつた諸相を明らかにすることができた。たとえば、実体相互が結び付き事物が構造化する過程での精緻な理論が、結合と分離の分析から明らかとなった。

(2) <関係>概念への着目は、同学派の存在論を動的に捉える見方を促した。同学派が説く世界の生成と破壊は、事物がどのように結合し、分離するかという動的な視点から説明されうる。そして、事物の結合と分離という動的な視点は、事物の運動性と事物の生成の過程から同学派の存在論を読み解くことを可能とした。従来、同学派の存在論は静的に捉えられてきた傾向にある。しかし、<関係>概念の分析は、従来からの静的な視点から導出できない同学派の存在論の動的な特徴を明らかとすることを可能とした。

(3) ベナレスの Sampurnanand Sanskrit 大学の Sarasvati Bhavan 図書館を訪れ、所蔵されている『ヴィヨーマヴァティー』の写本の一部を閲覧、書写した。そして、校訂作業に活用し、校訂の精度を高めた。この訪問は 2017 年 3 月に実施された。

(4) 『ヴィヨーマヴァティー』の「分離の章」の読解に際しては、インドのプネー大学大学院 サンスクリット高等研究所元所長の V.N. Jha 教授の支援を仰ぎ、インドにて読書会を開催した (2017 年 3 月)

(5) Indira Gandhi National Centre for the Arts (IGNCA)を訪れ、写本調査を 2019 年 8 月に実施した。

(6) 本研究の成果の一部を第 17 回国際サンスクリット学会と日本印度学仏教学会第 70 回学術大会を通じて発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 平野克典	4. 巻 65(2)
2. 論文標題 ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ学派の「普遍の定義」の再検討	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 776-782
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 平野克典	4. 巻 68(2)
2. 論文標題 『ヴァイシェーシカ・スートラ』10.7を巡る解釈について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 1071-1076
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Katsunori HIRANO
2. 発表標題 A Re-examination of the Definition of Universal in the Nyaya-Vaisesika
3. 学会等名 17th World Sanskrit Conference（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 平野克典
2. 発表標題 ヴァイシェーシカ学派の「普遍の定義」の再検討
3. 学会等名 日本印度学仏教学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 平野克典
2. 発表標題 『パダールタ・ダルマ・サングラハ』の「結合関係の章」に引用される『ヴァイシェーシカ・ストラ』10.7を巡る解釈について
3. 学会等名 日本印度学仏教学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考